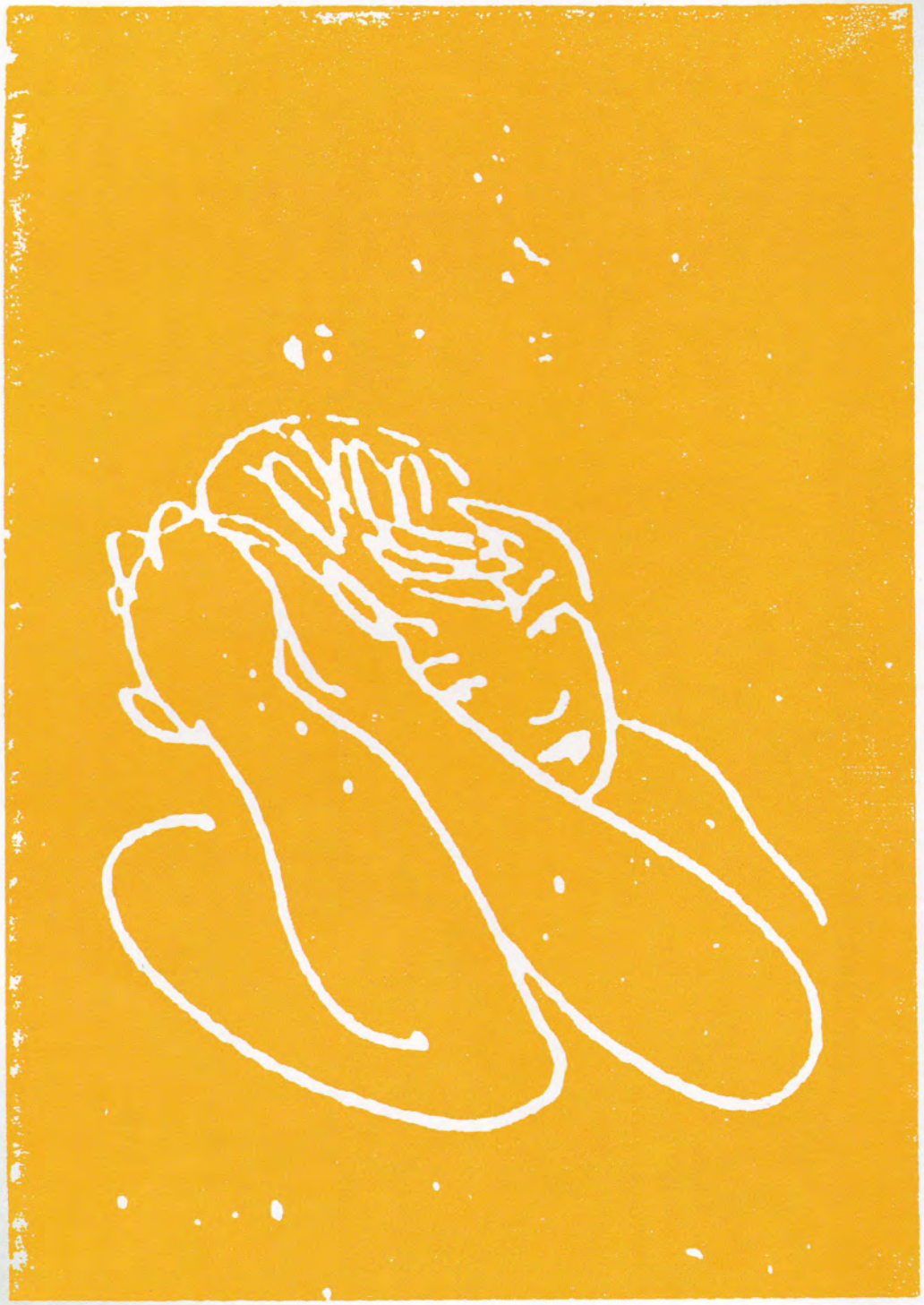
1998.12月 創刊号

f wave

「f・wave」とは、
fは、female－女性、
friend－友、
freedam－自由、
future－未来、そして
f－強く、を意味し、
waveは、波を表します。
f・WAVEは、社会環境の変化の波を誌面を通じて伝え、女性が生き生きと暮らせる未来をめざすコミュニケーション誌です。



特集1　ちょっと聞いて　私のつぶやき

特集2　あきる野発・ひと「私がやらねば」

ちょっと聞いて私のつぶやき

「エンパワーメント」＝「力をつけること」とは、私たち一人ひとりが、自分の内にすでに豊かにある力に気づき、人との関係性を問う中で、再び眠っていた力を息吹かせることです。

きらめいて生きる女のエンパワー

私のやりたいこと…そういえば子どもの頃はいろいろあった。花屋さん、スチュワーデス、デザイナーetc…結局夢はかなえられなくて、普通のOLをして、現在は専業主婦。日々の忙しさに追われ、夢なんて考えたことなかった。でも、いくつになっても心のどこかに夢をもっていたいな。いつまでも、ドキドキワクワクと、きらめいていたい。花屋さんになれなくても街中花一杯にすることはできるかもしれない。スチュワーデスは無理だけど、英語の勉強はできる。デザイナーじゃなくても洋服を作ることはできる。

一度きりの私の人生、悩んでいても始まらない。「行動」しなくちゃ。私自身が私の殻から一歩踏み出すこと。〝これが私のエンパワー〟

スイマセンいつも迎えはギリギリで

駅に着き、ママチャリ飛ばし保育園へ。それでも時間はギリギリ。時には一～二分過ぎてしまうことも…。毎度毎度のスイマセン。

ある時、保育園から職場に電話がかかる。「ドキッ、また熱をだしたかな。これから大事な会議があるのに」予感は的中、急いで夫へ連絡。とりあえず今日は夫の都合がつき、なんとか切り抜ける。

私たち共働きの夫婦にとって、子どもを育てることは、毎日がまるで綱渡り。結婚しても、子どもを産んでも仕事をしていたい。そして、働きながらも、もう少し余裕をもって子育てをしたい。

これって、私のわがまま？

パートにも年齢制限厳しいな

子どもから手が離れて、さあ働くぞと思って、新聞折り込みの求人欄に目をやる。時間は大丈夫、自給もまあまあ、条件…なぬ?!年齢制限があるではないか。しかも、35歳までなんて、5歳もオーバーしている。どうして年齢にこだわるのかな。ガッツはあるんだけどなぁ。

うちの夫だって、いつリストラにあうかわからない。残業はなくなるし、手当はカットされてるし…働きたいのに働けないなんて、いったい今の世の中どうなってるの？

夫からお母さんと呼ばれるワタシって誰？

「○○の奥さん」「○○のお母さん」「○○のお嫁さん」挙げ句のはてに、夫は私を「お母さん」と呼ぶ。とどめは義母の「ママ」。悪いけど、そんなふけた子どもを産んだ覚えはない。たまには「○○○さん」って呼んでみてよ。外国のように、夫婦が名前で呼び合うなんて素敵。

そういえばここ暫く、自分の名前を呼ばれたこともなければ、書いたこともない。町内会の募金も、宅配便の宛て名も全部夫の名前。

月光仮面のように「どこの誰だか知らないけれど～」と、何も謎に包まれて生きることはない。男性も女性も名前を呼び合って「自分」をはっきり意識しよう。

さっそく今日から私を名前で呼んでね、お父さん

特集1

―あたらしい可能性を求めて―

この言葉をキーワードに、「私らしく、生き生きと暮らしたい」そんなあきる野の女性たちのつぶやきを川柳に託しました。

メディアの中に水着の女横たわる

ある日の一日―
朝、通勤電車の中で、平然とポルノまがいの新聞を広げて、ニヤついているおじさま（?）を見かける。「全く何を考えているんだか」
会社では、新商品のポスターに女性の裸を使うという案が出ている。「ちょ、ちょ、ちょっと待ってよ」
残業してもうクタクタ。お風呂上がりにテレビをスイッチオン。水着姿の女性が映り、ご丁寧にもスリーサイズまで表示している。「も～う、やめて～」
今の世の中、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、はたまたインターネットにまで女性の性が商品化してていやになっちゃう。メディア側の「表現の自由」ってあると思うけど、見て聞いて、イヤだと思ったらイヤだと言う。これだって「表現の自由」でしょ。
これからは、声に出して言ってやるぞ！

おかえりとエプロンつけた主夫が待つ

「夫は家で家事をし、妻は外で働く」一昔前までは全くと言っていいほど、ありえなかったことでも、最近では珍しくない。
我が家では、早く帰った方が夕食を作るというルールがあり、私が仕事で遅い日は、夫が夕食を作って待っている。これが結構おいしくて、子どもたちの評判も良い。「男子厨房に入るべからず」なんてもう古い。「男は仕事、女は家事」なんて誰が決めたの？保育や看護にどんどん男性が進出してきているし、建設現場に女性の姿も珍しくない。
そんなことを考えながら、今日も夫の作った夕食を家族四人で食べる。「うーん、幸せ幸せ」

ストレスを癒すつもりがときめいて

最近、デパートにゆっくりと買い物に行ったことがない。パーマだって、ずっとかけていない。家事と育児に追われ、忙しい日々を送っている。
ある日、同窓会の案内状が届く。ストレス解消にと、久し振りにおしゃれをして会場へ。なつかしい顔に心もはずむ。ふと見れば、その昔恋心を寄せていた彼の姿が…。胸の奥がキュンとなる。長年忘れていた感情がよみがえる。
こんな気持ちは、結婚指輪をはめたあの時以来のことかもしれない。子育て、仕事、生活に夢中になっているうちに遠のいてしまったトキメキの世界。それでも幸せだった。でも、時々ちょっとだけドキドキしてみるのも、悪くないのでは…。
このトキメキは、夫にはヒミツにしておこう。

あきる野市女性行動計画
あきる野女性プランができました
―男女共同参画社会の実現をめざして―

あきる野女性プランは、家庭・学校・地域・職場などのあらゆる場で、男女平等を推進するためにつくられました。
「女だから」「男だから」ではなく、個人として互いに尊重しあい、平等の可能性を認めあえる男女共同参画社会の実現をめざします。

基本目標
- Ⅰ　人権尊重と男女平等の意識づくり
- Ⅱ　男女が共に生き生きと働くための就労環境の整備
- Ⅲ　あらゆる分野への男女共同参画の促進
- Ⅳ　男女の自立を支える生活基盤の整備
- Ⅴ　計画の推進

※この計画書は、社会教育課、中央公民館、秋川・五日市図書館、生涯学習センター、五日市ファインプラザで閲覧できます。

問い合わせ：
社会教育課女性係　558-1111（内線3015）

「私がやらねば」

―青春の思いが今を支える―

少子・高齢化の進む今日、多くの女性たちが福祉の分野で活躍しています。戦後、まだ女性の社会参加が少なかった頃から福祉の道に身を投じ、今も変わらぬ情熱を持ち続け、高齢者とともに人生を歩まれてきた和敬園園長の杉崎さんにお話を伺いました。

社会福祉法人　松楓会
特別養護老人ホーム　和敬園
常任理事 園長　**杉崎正子**さん

福祉の道を歩まれるきっかけは？

私が福祉の道に入ったのは、今から41年前の、戦後間もない一九五七年でした。

当時19才の私は、体調を崩して、気候の良い神奈川の叔母の家にいたのですが、ある時、建設業を営む遠縁から、西多摩の山の中に養老院を建設したという話を聞きました。そこでは、戦火によって家族を失ったり、家族制度の崩壊で、寄る辺なき人達が生活しているとのことでした。

その時何故か、その人達の手助けがしたいという思いにかられました。

まだまだ福祉に携わる女性が少なかった時代でしたので、反対もありましたが、私がしなければと、今思えばかなり思い切った行動にみえたかもしれません。

そのころは、生活保護制度下の養老院で、福祉といっても名ばかりで、国や自治体からの援助も少なく、運営は苦しかったですね。また、食料不足のおり、初代園長と共に野菜作りから養豚等々、自給自足の生活が随分と長く続きました。

その後、社会の大きなうねりの中で、昭和38年には老人福祉法が制定され、養老院は老人ホームへと名称も変わり、また、寝たきりなど介護が必要な高齢者を対象とする、新しい型の特別養護老人ホームも誕生し、福祉の増進が図られました。

現在、国や自治体では、ますます深刻化する高齢社会に向け、新しい制度への準備が進められていますが、私としては、やはり福祉の原点は「人が人らしく、人生を全うすることにある」と考えています。

入所者はどのような生活をしていますか？

和敬園や隣接している養護老人ホーム松楓園では、囲碁や将棋、手芸などのクラブ活動が活発です。外部からの指導者や、ボランティアの手ほどきにより、皆さん楽しく日々を過ごしています。中でも体操クラブは一番人気で、リハビリを兼ねて取り組まれている方も多いんですよ。

今日も元気に生き生き体操

その反面、女性は柔軟性やしたたかさもあるようで、生き方上手と言えそうです。

ともかく、男女ともに、仕事や人間関係を広げておくことは、とても大事なことですね。

介護支援はこれからどうなっていくのでしょうか？

平成12年度から介護保険がスタートすることは、ご存知の通りですよね。高齢者が必要に応じて、介護認定審査会で認定を受け、自分に合った介護計画をたて、居宅サービス、施設介護サービス等、介護に必要な給付を受けるようになります。特に施設サービスについてみると、入所は原則として施設と個人との契約によることとなり、施設を利用する場合、介護度により介護報酬が異なります。また、食事代その他日常生活の一部については自己負担があります。

これまで、老人ホームは生活施設として、家庭の代替的役割を担ってきましたが、これからは介護施設として介護を重視して、在宅に於ける生活が可能になるようなサービスを提供していくことになるでしょうね。

今後は、在宅介護といっても、子どもも高齢であったり、必要な時に在宅サービスが受けられるか、マンパワーはどうなるのかなど、これからの課題となるところです。

取材を終えて

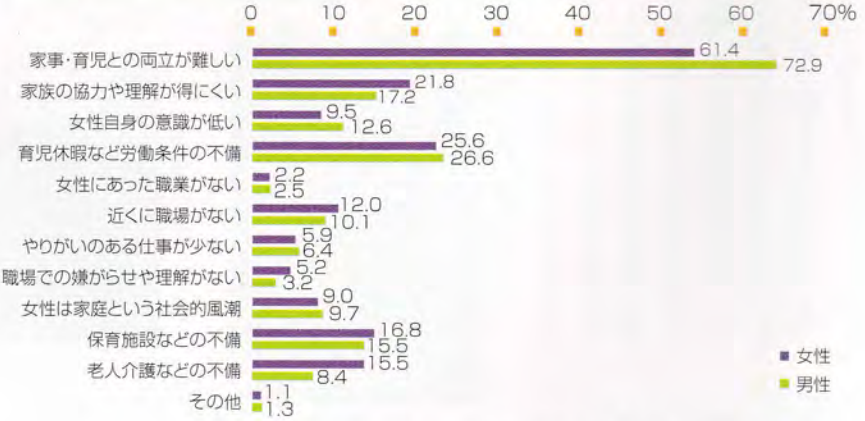
「一期一会」（意味…一生に一度限りであること）杉崎さんの人生訓の一つだそうです。「福祉への情熱を持ち続けることができたのは、多くの人との出会いがあったから」そう言って、足早に仕事に戻られた杉崎さんのさわやかな笑顔が、とても素敵でした。

高齢期を生き生きと暮らしていくには、どうすればいいのでしょうか？

「自分の生き方を決めておくこと」が大切ですね。男性はともすれば、過去の名声や肩書などに固執する傾向があるようですが、プライドを保ちながら、しっかりと現実を見つめるということも必要なことだと思います。その際、早めに妻離れしておくことも大切ですね。（笑）

くつろぎルームに飾られている作品

女性が仕事を続けていく上での障害



「あきる野市男女平等に関するアンケート」（平成9年5月実施）より

女性問題Q&A

長引く不況に好転の兆しはなく、新卒女子の就職困難が続いています。不況による雇用調整の嵐は、働く女性にも深刻な影をおとしています。

Q 突然「会社をやめて欲しい」と言われました。どうしたらいいでしょうか？

A 「退職を」と声をかけられた場合は、相談機関に相談しましょう。

退職強要、解雇、賃金未払いなどの労働問題や、セクシュアル・ハラスメントなどの新たな職場環境問題について、「労政事務所」や「働く女性のための弁護団」が電話で相談に応じてくれます。また、退職、解雇によって次の仕事を探したり、失業給付を受けるには、自分の住んでいる地域の「ハローワーク」に出向き、所定の手続きを行いましょう。

失業は、経済的な危機だけでなく、精神的にも不安になります。みなさんのチャレンジ人生を応援するのも相談機関です。

次のところで労働に関する相談を行っています。

- 立川労政事務所
  0422-525-6110
- 働く女性のための弁護団
  03-3251-4478
- ハローワーク
  （公共職業安定所）
  青梅0428-24-8609

おすすめ図書

「Here and Nowの心理学」

海原純子　著
KKベストセラーズ

医学博士が書いた心理学の本というと、少し難しいイメージがあるかもしれませんが、神経言語法という医学的な実践方法なども紹介してあり、とても読みやすく書かれています。項目が38に分かれており、「今、演じている役柄を捨てなさい」「体をいたわることは心をいたわること」など、どの内容も、意表を突くものばかり。

自分らしさを見つけたい人、なんとなく毎日が平凡で、変化や刺激が欲しい女性におすすめです。

※この本は、市内図書館で借りられます。

NEWs

男女平等教育研究発表会開催される

10月23日(金)あきる野市立増戸中学校において、「生きる力を育む性教育を基盤にした男女平等教育の推進」を主題とした研究発表会が開催されました。

同中学校は、平成九年度に東京都の男女平等教育推進校の指定を受け、男女共同参画社会に生きる力を育む人権尊重教育「自分を大切にし、みんなと支え合って生きる人を育てる男女平等教育」の実践的研究を進めてきました。

公開授業と研究発表には、市内及び近隣はもとより全国各地の学校の教員、PTAなどの学校関係者や地域の方々が数多く参加しました。

「今日、子どもたちを取り巻く生活環境には、人間の性を興味本意に扱ったり、性に関わる意識や行動を刺激する情報が氾濫しています。性に関する指導を通して、生命や、お互いの人格を大切にする心を育てることが、これらの問題を解決する糸口になると考えています。」と、竹内良夫校長。

学校教育におけるこのような取り組みが、今後ますます充実していくことを期待します。

公開授業の様子（増戸中）

ジェンダーの答
- 「男は仕事」「女は家事」これって変じゃない？
- 「男の子は青色」「女の子は赤色」って、誰が決めたの？
- 夫婦茶碗、夫の方が大きくて、妻の方は小さいってフシギ?!

ジェンダーチェック

明子さん一家のある日のひとコマです。
この中の会話とイラストにジェンダーが
3つ隠されています。探してみて下さい。
（答えはp6）

妻・明子（30歳）専業主婦
夫・良夫（34歳）会社員
長女・愛（4歳）幼稚園児
義父・五郎（68歳）無職

ジェンダーとは？

生物的な性差（セックス）に対して、「女らしさ・男らしさ」といった社会的・文化的に形成された性差のこと。

社会や学校において、「男は男らしく」「女は女らしく」と要求される結果、男女それぞれのジェンダー意識が形成されていき、これが「男は仕事」「女は家事」といった固定的性別役割分担意識の根本となっています。

街角スポット 1

養沢・乙津・戸倉に残る いにしえ女性たちの巡拝塔

最近は、名所旧跡を急ぎ足でまわるパック旅行が主流のようですが、時にはゆったりと途中下車をしてみるのも、またステキな発見があるかも知れません。

きょうは、私たちの住むこのあきる野市に残されている『巡拝塔』にスポットを当て、いにしえの旅に出かけてみることにしましょう。

話は遠く江戸時代、女性が旅に出ることは夢のまた夢だった頃。旅と言っても、今時の"グルメツアー"などとは程遠い、実に過酷な旅でした。それは観音霊場にお札を納めて廻る"巡拝の旅"と呼ばれるものです。もちろん、当時のこと交通手段などあろう筈もなく、自分の足だけが頼りです。

そして、無事に帰ってくると、記念に『巡拝塔』を造立しました。それだけ、思い入れの深い旅になったからでしょう。

特筆すべきなのは、養沢・乙津・戸倉地区に、この『巡拝塔』が集中して造られたことです。

いったい何故、このような山間の小さな村から、旅に出るという発想が生まれたのでしょうか。

考えるに、当時の山深い谷間の生活は、密閉された箱の中で暮らしているようなものだったのかも知れません。苦難の旅とはいえ、脱日常は、今でいうストレス解消と知見の役を担っていたと思われます。

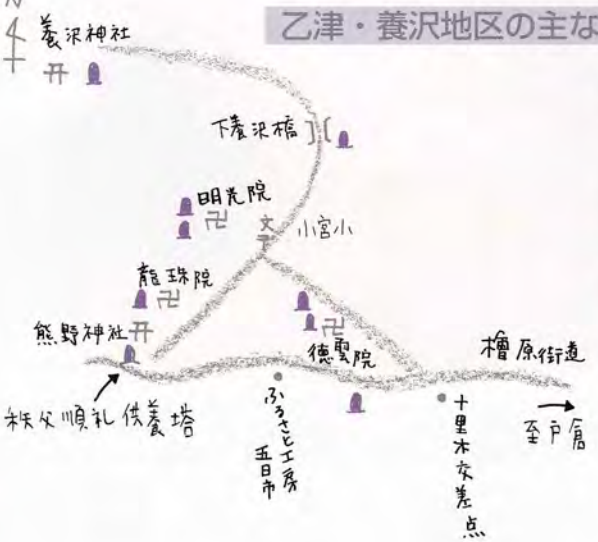
さて、最初の旅は一七四六年、乙津村・青木平村の男衆十五名が秩父観音霊場巡りの旅に出発しました。女性も負けてはいません。それから二年後、十人程の女性グループが、果敢に秩父霊場巡りに挑戦しました。お蚕・糸取りで溜めたヘソクリを握って。

これまで女性であるというだけで、様々な弊害を受けてきたであろうに、この行動力は実にアッパレとしか言いようがありません。そして、この旅を許してくれた、男衆の太っ腹なところにも気概を感じるではありませんか。実のところ、今も昔も「カアちゃん強し」と言えなくもありませんが……。

次の休日は、あきる野に残る我らが女性先達の『巡拝塔』を巡る旅に出かけてみませんか。

参考文献
『父が語る五日市ものがたり』石井道郎
『五日市の石仏』五日市町郷土館

乙津・養沢地区の主な巡拝塔



「秩父順礼女旅」

Information インフォメーション

世界人権宣言50周年記念ビデオ

みんなちがってみんないい

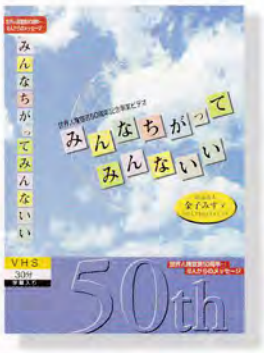
「すべての人間は生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。」世界人権宣言が採択されてから今年で50周年を迎えました。

世界人権宣言は、1948年（昭和23年）12月10日に国際連合で採択され、これを記念し12月10日を「人権デー」とし、この日を最終日とした一週間を「人権週間」と定めています。

人権が尊重される社会、それは女性も男性も生き生きと暮らせる社会なのです。

世界人権宣言50周年を記念し、東京都と23区多摩市町村が一体となってビデオを製作しました。このビデオは、著名人の方々から様々な人権についての、心のこもったメッセージにより構成されています。

企画：世界人権宣言50周年記念事業実行委員会
製作：毎日映画社



※このビデオの貸出しを行っていますので、社会教育課女性係までお問い合わせください。

report レポート

男女共生セミナーに参加して
「女性と政治」参加から参画へ

10月19日（月）あきる野市教育委員会主催の男女共生セミナーに参加しました。

総勢39名、一路国会議事堂へ。3日前まで国会が開かれていたせいか、赤いじゅうたんが敷きつめられた本会議場に一歩足を踏み入れると、その熱気が感じられました。

大理石のモザイクの床、ステンドグラス、珊瑚の柱など、建物内部はまるで大劇場のよう。

午後からは、作家であり参議院議員でもある円より子さんの「女性と政治参加」をテーマとした講演。

多様化する女性の生き方に、公正な法制度を作ることが大切で、そのためにも、一人でも多くの女性が政治に参加することが必要と力説されました。「今がんばるのは、自分たちのためだけではない。次世代の子どもたちのために…そしてそれがパートナーの幸せにもつながる。」この言葉がとても印象に残りました。

講演終了後、会場周辺を散策。そういえば、ある女性議員が以前テレビで、議員会館には女性用トイレがないと話していましたが、やはりその通りで、いまどき男女共用とは…。まだまだ政界は、男性中心と感じました。

国会議事堂前で記念写真

編集後記

- 編集委員？カッコイイ、ちょっと大変、でも楽しかったのかも。（相澤六津子）
- ともに・つくる・あした～あきる野の暮らしと文化を大切にしたい。（沢田美佐子）
- 編集に関わって、「女性」について考える機会が増えました。（隠田志保）
- とにかく夢中で書きまくった。フー。一息ついて、気分は最高。（中山佳代子）
- ♪人生楽ありゃ苦もあるさァ～と歌い続けた半年間、頑張りましタ。（桝永朝子）
- 何事も経験と始めた編集委員。創刊号無事発行し、ホッと一息！（丸山きよみ）
- タイトル決めは大変だったけど、決まった時はかなりうれしかった。（水口倫子）

＊表紙のロゴとデザインは、隠田志穂さんによるものです。

この情報誌に関するご意見・ご感想、また、誌面で取り上げてほしいテーマなどを下記までお寄せ下さい。

タイトル誕生秘話

エフ・ウェイブ　誕生まで

f wave

女性情報誌を発行するにあたり、いつまでもだれにでも親しみやすい誌名は何が良いのか？

私たち編集委員は、いろいろな案の中から検討をした結果、あきる野の女性たちへ熱き思いを込め、「f wave」というタイトルにしました。

fは、female－女性、
friend－友、
freedam－自由、
future－未来、そして
f－強く、を意味し、
waveは、波を表します。

f・WAVEは、社会環境の変化の波を誌面を通じて伝え、女性が生き生きと暮らせる未来をめざすコミュニケーション誌です。

あきる野女性情報誌は、市役所・公民館・図書館、生涯学習センター、ファインプラザなどに置いてあります。

f wave
エフ・ウェイブ
創刊号　1998年12月発行

発行／あきる野市教育委員会社会教育部社会教育課
〒197-0814　あきる野市二宮350
Tel 042-558-1111（内線3015）
企画・編集／あきる野市女性情報誌編集委員会

R40 古紙配合率40%再生紙を使用しています